

洛友會會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友會



林 重憲先生 追悼号

京都大学名誉教授、洛友会副会長

長 林 重憲先生には去る七月二十八日午後六時二十五分をもって逝去されました。享年七十三才生者必滅は世の理とは云え、偉大な学者でありかつ人情味溢れる先生を喪ったことは誠に痛恨哀惜の極みであります。

茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なおご葬儀は七月三十一日、生前先生が御昵懇であられた今出川川端の正定院で行われました。参列者跡を絶たず、先生のご遺徳の程が偲ばれました。左記に先生の御略歴を記し偉大な先生の御足蹟を偲ぶ縁といたしたく存じます。

林 重憲先生略歴

明治36年8月18日 長野県松本市

にて誕生

大正10年3月31日 長野県立松本中学校卒業第4学年修了

大正13年3月25日 松本高等学校理科甲類卒業

昭和2年3月30日 京都帝国大学工学部電気工学科卒業

昭和2年9月22日 京都帝国大学大学院入学

昭和4年3月7日 京都帝国大学助教授(工学部勤務)

昭和11年8月12日 工学博士

昭和17年4月17日 航空工学第三講座分担

昭和19年3月11日 京都帝国大学教授(工学部勤務、航空電気学講座担任)

昭和20年12月31日 航空電気学講座より電気工学第7講座に所属

昭和21年2月28日 電気工学第7講座より電気工学第3講座に所属

昭和21年4月30日 電気学会浅野博士奨学祝金受賞

昭和25年3月31日 京都帝国大学研究所併任教授

昭和27年5月 電気学会関西支部長

昭和27年9月1日 京都大学防災研究所協議員

昭和28年5月 電気通信学会副会長

昭和30年3月31日 アメリカ合衆国同(年7月3日) 国及びカナダへ出張

昭和30年5月 電気学会副会長

昭和31年5月19日 電気学会文献賞受賞(昭和31年度)

昭和31年9月1日 京都帝国大学研究所長

昭和31年11月30日 京都大学評議員

昭和33年5月 日本自動制御協会副会長

- 昭和35年1月20日 日本学術会議第5期会員
- 昭和36年4月1日 電気工学第三講座より電気回路網学講座に所属
- 昭和37年4月1日 京都帝国大学部附属オートメーション研究所施設併任教授
- 昭和37年5月26日 電気学会文献賞受賞(昭和37年度)
- 昭和38年1月20日 日本学術会議第6期会員
- 昭和38年5月 電気学会会長
- 昭和38年10月25日 中華民国、フ同(年12月23日) ランス、連合王国、アメリカ合衆国へ出張
- 昭和38年11月16日 名古屋大学プラズマ研究所併任教授
- 昭和41年1月20日 日本学術会議第7期会員
- 昭和41年11月16日 京都帝国大学部附属超高温プラズマ研究施設併任教授
- 昭和42年3月31日 京都大学を停年退官
- 昭和42年4月1日 京都大学名誉教授
- 同 同志社大学教授
- 同 関西電力株式会社顧問
- 昭和42年5月 財団法人応用科学研究所理事長
- 昭和48年11月3日 勲二等旭日重光章を授けらる
- 昭和52年7月28日 逝去、從三位に昇叙

林 重憲先生のご遺徳を偲ぶ

葬儀委員長 近藤 文治

京都大学名誉教授 勲二等從三位旭日重光章 林 重憲先生は去る七月二十八日午後六時二十五分逝去されました。先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

林先生は明治三十六年八月十八日長野県松本市のお生れで、近く七十四回のお誕生日を迎えらる許りの時に長逝されたのであります。先生は郷里の松本高校を経て昭和2京都帝国大学工学部電気工学科を卒業になり、その後暫く大学院で研鑽をつまれば、昭和4年3月京都帝国大学助教授となられ、故鳥養先生の下で過渡現象特

に演算子法ならびに送電線の進行波の研究に従事されたのであります。昭和十九年三月教授に任せられ航空電気学講座をご担任になりましたが、昭和二十一年二月、鳥養先生が総長になられたあとを受けて、その後継者として電気工学第三講座(後の電気磁気学講座)をご担任になりました。さらに昭和三十六年四月、電気工学第二学科が発足するに当り、その創設者として同学科の電気回路網学講座を担当され、同学科の基礎を固める重大な時期を指導されました。その後昭和四十二年三月停年退官

されるまで約四十年の長きに亘り、京都大学に在職され、研究ならびに教育に献身されたのであります。

さて先生のご研究は極めて多方面に亘り、その全てを尽すことは私には到底不可能であり、せめて、その主なものだけでもご紹介し、先生のご偉業を偲ぶますがと致したいと思ひます。

まず演算子法に関する研究があります。この研究はヘビササイド

演算子法の基礎理論に関するもので、微分方程式を解く際必要な初期値に第1種初期値(「I」)における値」と第2種初期値(「II」)における値」とがあり、通常

われわれがいわゆる初期値として与えられるのは、前者であります。が、微分方程式を解くのに必要な初期値は後者であることを指摘されました。これら二つの値が異なる

場合にも正しく演算子法が適用できるようにするためには、微分方程式の樹て方が問題であることを明らかにして、その具体的な方法を提案され、これを行列を用いて

表現されました。この方法は約二十年程前から、電気回路や制御系などダイナミカルシステムの厳密な解析法として、広く用いられる

ようになった状態方程式と全く同じもので、先生は昭和の初期に既にその必要性を唱え提案されてい

たのであります。

さらに先生は、提案された行列微分方程式に前述の初期値問題に対する先生の独創的な解法を組み合わせ、断続回路の新しい解析法を完成されました。このとき提案された解法は、今日われわれが用いている状態方程式の解法と全く軌を一にするものであります。先生はこれを既に昭和十七年の電気学会誌に発表されているのであります。

以上二つの研究の成果は「Periodically Interrupted Electric Circuit」という英文の著書に集約されていますが、名著としてロシア語にも翻訳されています。

つぎに先生の偉大なお仕事の中で、誰もがよく知っているものに送電線に沿う進行波に関する研究があります。この研究は雷や送電線の故障・開閉など種々の原因で発生する進行波の伝搬特性を理論

ならびに実験によって徹底的に究明されたものであります。特に行列表示を用いて多送電線における進行波の伝搬現象を解析する独創的な方法を確立され、実際の送電線の進行波現象を刺すところなく

解明されました。また単に理論的なご研究だけでなく、進行波の新しい測定法を開発されて、多くのフィールドテストを実施され、進行波によって電力網に発生する異

常現象の解明に多大の貢献をされたのであります。先生の名著「Surge on Transmission Systems」という本はこれらの成果を集約されたもので、世界の水準を抜く立派なご業績として高く評価されたものであります。

以上のご業績により先生は電気学会浅野博士奨学祝金を受賞(昭和二十一年)され、さらに前述の2冊の英文の著書はいずれも電気学会の文献賞に選ばれたという事実は、先生のお仕事が如何に立派なものであるかということを実に物語つて余りあると思ひます。

さらに先生のご研究は自動制御、原子炉、核融合などの分野にも及んでいます。これらのご研究は、いずれも黎明期にあつたわが国のこの分野の研究に対して先駆的な役割を果し多くの成果を挙げられたのであります。その内容は紙面の都合もあり、ここには省略させて頂きます。先生のこれらの分野におけるご業績は学術的な

成果だけでなく、自動制御の分野にあつては、京都大学工学部にオートメーション研究施設を全国に先き駆けて創設されました。また原子炉の分野では、全国の大学の共同利用施設として京都大学に原子炉実験所を創設するに当り、その担当当局である工学研究所の所長に就任され、設置場所の決定を

めぐり、極めて厳しい世情の中にあつて、計画の推進を指導され、現在の原子炉実験所の基礎を築かれたのであります。また、核融合に関して、ヘリオトロン核融合装置の開発を指導される一方、高温プラズマ研究施設を創設

されました。この研究施設はその後発展し、現在のヘリオトロン核融合研究センターとなつたのであります。エネルギー問題の喧ましい今日、先生の先見の明と偉大なご業績が偲ばれる次第です。

以上述べました研究の面での輝かしいご業績だけでなく、学内にあつては、電気工学第二学科の創設を始め京都大学評議員、工学研究所々長として学内行政の面で既述のようなご業績があつたのみならず、学外にあつては、学術会議

会員として、二期(六年間)に亘り、わが国の学術発展のために貢献されたのであります。また学会にあつては、電気学会々長を始め、各種の学協会・委員会の要職を歴任され、電気工学界の文字通り重鎮として、斯界の発展のため指導的役割を果されてきたのであります。

一方、先生は教育者として、洒脱や天真爛漫という言葉は正に先生のためにあるかのような、全く銜のないご性格、慈父のような温かいご心情、加うるに円満なご

人格により、先生のご教導を受けた人々に、深い感動を与え、多くの人材を育てられたのであります。現在、各方面に活躍されている子弟の数の多さにおいても他に類を見ないと云われていますが、これも先生の偉大なご人徳の至るところであります。

先生は以上のような数々の輝かしいご業績を残され、昭和四十二年三月、停年退官されました。その後も同志社大学教授、応用科学研究所理事長、関西電力株式会社顧問としてご活躍になっておられましたが、数年前から、健康すぐれず、岩倉のご自宅でご静養に専念されておりました。しかしその

効もなく最近衰弱が著しく、遂に去る七月二十八日心不全のためご逝去になりました。生者必滅は世の常とは云え、偉大な先生を喪つたことは痛恨の極みであります。

日頃先生のお近くにあつて、何かにつけて先生のご教導を受けて育つた私にとって、先生のご逝去は肉身を喪つた悲しみにもまさる思いが致します。どうか先生心安らかに眠り下さるよう衷心よりお祈り申し上げます。

お祈り申し上げます。

お祈り申し上げます。



林 重憲先生の御逝去を悼む

洛友会会長 松田 長三郎

本会副会長長 重憲先生は、去る七月二十八日、惜しくも御逝去になりました。誠に哀惜痛恨の極みであります。昨年九月には、会長鳥養利三郎先生の御逝去に遭ひ、今またこの悲報に接するとは、幾重にも悲しいことで、ここに洛友会会員一同に代り、謹んで感謝の誠を捧げ、御冥福をお祈り申し上げます。

先生は明治三十六年八月十八日、長野県に御出生、松本高校を経て、昭和二年三月、京都帝国大学電気工学科を卒業、大学院を経て、昭和四年助教に任官、昭和十九年教授に昇任、昭和四十二年三月定年退官せらるるまで、電気学を専攻され約四十年の長きに亘り、學術の研究と後進子弟の教育に専念され、これらの成果は、電気学会誌上に、空前と思われ位の数々の論文を、次々と発表せられ、幾度も学会賞を受賞されました。これらは、何れも先生の得意とされる独創的な数学を駆使されたもので、斯界における先人未到の境地を開拓し、その先駆的役割を果されたものであります。これ等多数の研究を骨子として、「演算子法」「送電系統の進行波」

「断続回路」などの英文著書を書き、(これはロシア語にも翻訳された) 斯学にも多大の貢献をなさいました。また工学研究所所長、大学評議員、オートメーションや超高温プラズマの各研究施設の併任教授を兼任されたりなどして、大いに活躍されました。また将来のエネルギー源として注目されている文部省の大規模研究の随一たるヘリオトロンの研究の基礎を築かれたことも特筆すべきことであります。又多数の研究

者・技術者を養成して、社会有用の材を送り出されたことも大きな功績であつて、将来先生の遺髪を継いで、我國の学界技術界に大いに活躍せられることと信じます。学問の研究と教育に、寧ろの無かつた日常であられたにも拘わらず、常に余裕綽々として悠揚迫らず、時に囲碁を楽しみ、プロレスに熱中されるなど、豊かな趣味にも熱心で、一体いつの間にか、これら多数の論文が書かれるのかとお尋ねした位でありました。先生の輝やかしい業績については、近藤教授が記載される筈でありますので、省略致しますが、学外においても、電気学会会長、電

子通信学会副会長を始め、日本學術会議には三期に亘り会員として尽力され、又退官後は同志社大学教授、財団法人応用科学研究所理事長、財団法人近畿地方発明センター理事、電気評論役員、同大阪側編集委員長、各所の技術顧問等として斯界の指導に当られました。特に本洛友会には、創設以来、副会長としてその運営に大いに貢献して下さったことは感謝の外ありません。

先生はそのとなり恬淡にして豁達、小事に拘泥せず、人情に厚く、人間味溢るるホホ笑ましい多くのエピソードを残され、語りつがれていますことは、毅然たる中に

林 重憲先生を偲ぶ

元神鋼電機常務取締役 田中 卓次

林先生は鳥養先生を慕ふかのようになつて亡くなりました。誠に哀惜の極みであります。

私は大変先生の御援助を頂きましたので、ここに昔を偲んで今亡き先生への御礼の言葉と致し度いと思ひます。

先生の偉大な研究業績については今更申述べるまでもなく、先生の退官記念集(昭和四二年九月発行)にてご存知のことが出来ます。かつて鳥養先生が「林君を門下生に持ったことを誇りに思つてい

も、温かな親しみ易い御性格の一面を示すものであると存じます。ここ数年來、病床に親しまれることも多かった御日常であられました。が、今俄かに幽明境を異にして、再び温容に接することのできませんことは、悲しくも淋しい極みであります。この得難き大学者を失なつたことは、我が学界の大きな損失であるとともに、私共の深い悲しみであります。

ここに限り無き感謝と敬仰の誠意を捧げ、重ねて会員一同と共に、先生の御冥福と、安らかな永遠のお眠りを祈り、併せて御遺族様の御多幸をお祈り申し上げます。

「とまで云はれておりました。又戦後社の卒業生がソ聯に出張の節、モスクウの書店で先生著作の書籍を発見して、国際的の先生であることを認識したと話しておりました。実に惜しい人を亡くし、残念なことでありました。

林先生と私は同じ時代に京大の教室に通つたものですが、クラスが異なるので当時は全然知りませんでした。卒業後鳥養先生の教官室でお目にかかった事がありますが、其の時

時は只、評判の非常に電気数学に強い先生はこの人か、と思つただけでした。

戦時中神鋼電機(当時神戸製鋼所電機部)の製品は殆んどが航空機用電気機械器具であるので、航空電気学講座を担任の林先生の御指導を頂いて以来、親しくお話を承るようになったのです。

戦後鳥養先生と交替に顧問役を委嘱し、以後屢々工場に来て頂き御指導を頂きました。

戦後混頓たる世情の中で航空電機一色の全製品を直ちに民生品に転換する必要に迫られ、種々先生の御意見を承りました。

現在製品中の電磁振動機は先生にヒントを頂いたものです。又BW試験機(電話線故障発見装置)は先生の発案のものであります。又戦後社内技術者の不足を補う、有能な技術者を多数推選して頂きました。其の上先生御指導により博士号を得た者も社内教名に及んでおります。

かくの如く神鋼電機は創業以來種々御指導と御援助を頂き、大いに社の発展に寄与して頂き感謝している次第であります。私は終戦当時より度々林先生の教官室に参りましたが、御宅へも伺いました。何れの時でも先生の門下生や、学生の訪問中に都合ふ事が多くありました。

何事でも親身になつて相談に
し話をされていたようです。

先生は外向には大変謙遜されま
すが内向では家事には一向に無頓
着で亭主閑白とお見受けしまし
た。御宅で学生等と会食されてい
る時にも接しましたが、戦後物資
不足の折、七福神の御子様と駄々
子の閑白亭主を抱え、其の上学生
の世話をされる奥様の御苦労の程
お察し致しました。

林 重憲博士をいたむ

昭和2年卒 難波 捷 吾

私は大正十三年から昭和二年ま
での三年間、林君と学生生活を共
にした同級生の一人である。

林君は、誰もが知るように、数
学が好きで、学窓を出てからも一
生涯、数学を愛したといえよう。
そういえば、昭和二年私と同時に
当時の通信省に入った何人かの同
僚には、出身学校はみなちがう
が、どういふわけか、林君のよう
に、数学が非常に好きだという人
士がかなり多数いた。特に後藤以
紀、中尾哲夫、早田保実、小泉四
郎の諸君は、それぞれ担当する問
題を、数学的に処理することに熱
をあげていたものである。その時
代においては、強電流の世界で
は、過渡現象によって発生する線

により、先生は何の憂もなく研究
一筋に打込み、偉大な業績を残さ
れたことと存じます。

この永年尽された奥様の功に、
深く敬意を表はし、多大の感謝を
致すのであります。
先生の教を受けた門下生は多数
各所で立派に活躍されておりま
す。
心安らかにお眠り下さい。先生
の御冥福をお祈り申します。

路の異常電圧などが、数学的処理
の対象となり、一つの方法として
別宮博士の対称座標法が披露され
た。また弱電の方では、搬送通信
を多重化するための基本問題とし
て、波形とか漏話などの数学的取
扱が重要視されていたものであ
る。

それから星霜五十年、これらの
人々のうち、後藤君は工業技術院
長、東大、明大教授になり、早大
教授に転じた小泉君と共に今も健
在であるが、電々公社の技師長と
早大の先生をつとめた中尾君と、
電機大学に転じた早田君とは他界
した。同じような「数学屋」であ
つて、ただ一人京大で活動してい
た林君も、今回不幸他界された次

第である。

われわれの時代に、進んで学校
の先生になった人は、みな学問が
好きで一生涯この道で仕事をする
つもりで教職を選んだわけである
が、運命は冷酷で、二十年後の日
本は、大戦に敗れ、大きな社会変
革の波にまきこまれ、かつての好
学の士が、はからずも学長とし
て、又は幹部教授として、既成秩
序に反撥する戦後の若者に対処す
る立場に置かれることになった。

しかも、新しい教育秩序もまだ存
在しないままに、その間に立って
筆紙に尽しがたい苦勞を味わうこ
とになった。おそらく林君も、こ
種の問題で、心身をさいなまれ
る何年かを送られたことであろ
う。

さて私の同級生からは林君の外
に、もう一人熊谷三郎君が大学教
授になった。彼は旅順工大から阪
大に転じて多年通信工学科の主任
教授をつとめた後、愛媛大学学長
在任中に不幸急逝された。林、熊
谷両君は、われわれ同級生がもつ
とも敬愛する友人であったが、し
さいに分析すると、熊谷君の場合
は、話が巧みで、話にユーモアが
あるが、林君の場合は、話をする
前にふんいきにおいて既にユーモ
アを感じさせるものがあつた。
今から二十年ぐらい前のころ、
私が社用で大阪に出張する際に、

林、熊谷両君、それに前田憲一教
授など二三の先生がたを一夕お招
きして歓談する機会を時々つくつ
ていた。いつも大阪のきまつた料
理屋で開き、大へん愉快な会合で
あつたが、それがいつの間にか有
名になり、当時私の勤めていた会
社の社長であつた渋沢敬三さん
(故人)が、「難波君、わしもそ
の仲間に入れてくれ」ということ
で、その後は渋沢さんもこの会合
を大へん楽しんでおられた。財界
の大御所でも、これほど徹底した
楽しい会合は珍らしいのであろう
と、われわれ貧乏技師屋どもは自
画自賛したものである。

東京地区に住むわれわれクラス
メートは、毎月十六日に、昼の食
事を共にして雑談することになつ
た。

林 重憲兄を偲んで

昭和2年卒 真田 安 夫

林兄が亡くなられてから、早く
も一カ月が過ぎ、日が経つにつれ
いよいよ哀惜の情が加わり淋しさ
がつのつて来る。

最初の出合いは大正十三年春、
京大電気工学科に入学のときで、
幸いにも同じ実験グループで、す
ぐ話合う仲になつた。
口数は少ないが、飾気もなくどん
な相手にも友情を示され飄々とし
た素振りや魅力があり、これは終

ているが、林君と熊谷君のことは
いつも明るいユーモラスな話題を
提供している。先年林君が叙職さ
れた際、夫人とともに勲記受領の
ために上京されるというので、そ
の機会に祝賀会を催してはどうか
という話になつたが、病軀をおし
て旅行される様子を承つたので、
クラスメートが相談して、会合の
計画は遠慮することとし、その代
りに一枚の色紙にみんなでお祝の
寄せ書をしてお届けした。これも
今ではなつかしい思い出になつ
た。

あれこれ雑文を書いてみると、
林君があの特長のある白髪をゆる
がせながら、ひょうひょうとして
眼の前にあらわれるような気がす
る。はるかに冥福を祈る。

生変らない人柄であつた。
昭和二年、学業を了え私共は財
界パニックの中をそれぞれの道を
選んで全国に散つたのであるが、
林兄は選ばれて教室に残られ、教
育者として多数の技術者、研究者
を育成された。
また、ご自身研究者としても幾
多の輝かしい研究業績を挙げら
れ、多年に亘り日本学術会議会
員、日本電気学会々長、その他電

気関係学会、各種研究委員会などの
の枢要な地位にあって、わが国電
気工学の発展のために絶大な貢献
をされたことは、今更申述べるま
でもない。

私共が学窓を出て今年は正に五
十年、顧みると不況、事変ついで
世界動乱の中をくぐり、恰も昭和
年代の喜びと悲しみの中を共に歩
いて来たような感じがする。

戦後二十二、三年頃、逸早く林
兄を中心に西枝兄などのお世話で
同期生が教室に集まり、ついで京
都郊外洞ヶ峠の麓にある古刹門福
寺僧堂に本野先生はじめ旧師のご
臨席をいただき、井沢泥竜老師の
下で物故された恩師並に諸兄のご
冥福を祈り、一夜を共に語り合い
旧交を温めたことは印象深く語草
となっている。

爾来この同期会を昭二会と呼
び、五年毎の折りに会合するこ
ととなり、昭和三十二年には満三
十年を迎えたので、前回同様林兄
を中心に京都へ集合し、先ず寺町
の天性寺で師友物故者の慰霊法要
を修し、次いで鴨川畔の川村楼で
鳥養先生はじめ旧師のご臨席をい
ただき一夕を共に語り合った。

次いで昭和四十二年、卒業四十
周年を迎えたが、丁度林兄も京大
を定年退官されることになり、昭
二会を林教授退官記念会の前日に
開催したが、参会者三十名近くが

全国より集まり、阪本、松田両先
生のご臨席をいただき、まず南禅
寺において師友物故者の慰霊法要
を修した後、一同貸切バスにて比
叡を越え、琵琶湖畔で林兄を中心
に一夕を歓談で過ごした。
翌日京都ホテルで開催の記念会
には一同出席し、兄のご功績をた
たえ、私も友人を代表して祝詞を
述べた。

祝宴には令夫人はじめ令息、令
嬢、令孫お揃いで出席され、林兄
も頗る元気で挨拶されたのは印象
的であった。

これまで五年置きに会合した昭
二会も席上誰いうとなく、お互い
還暦を過ぎ余命幾許もない、これ
からは毎年集まりましようやとい
うことで、爾来毎年秋に京都周辺
や各地で一泊二日の観光を楽しみ
ながら旧交を温めて来た。

今年には卒業五十年にあたり、か
ねて内田兄を中心に京阪在住の諸
兄のお世話で、一同叡山に上り延
暦寺で物故された師友の慰霊法要
を厳修してのち、山上ホテルで一
期一会の縁を大切に旧交を温める
予定であるが、新仏の林兄の在り
し日の憶い出話を時を過ごすこと
であろう。

林兄は教育者として、また学者
として偉大な存在であったが、人
間的にも天真爛漫、飾り気のない
魅力ある人柄で、生前色々と珍談

奇談もあったようである。

洛友会が昭和二十七年設立さ
れ、翌年中国支部も発足したが、
かねて林教授には私共の関係した
中国電力の技術指導をお願いして
いたので支部総会には毎年のよう
にご出席をいただき、同窓諸君と
共に一夕の歓を共にした。

白髪温顔に盃を重ねながら、興
到れば色々とかくし芸を披露さ
れ、参会者を歡ばされた。

特に記憶に残るのは韓国人に扮
して鴨緑江節の手踊、遊行僧のア
ホダラ経、中でも電灯を消した暗
闇の中を青白い灯火(食塩にアル
コールを浸したものを)を片手にし
たお化けの演技などは真迫の芸で
兄を知る広島の人々の語草になっ
ている。

憶い出は尽きないが、兄と最後
の出会いはいづの頃か、退官後も
毎年支部総会には元気な姿で出席
されていたが、昭和四十五年六月
の支部総会に鳥養先生、近藤教授
と共に出席されたのが最後のよう
であり、もう七年も前のことにな
る。

その頃から病魔の冒すところと
なり、長い闘病生活に這られたよ
うである。

昭和四十九年、友人門弟達によ
る古稀、叙勲のお祝いの席には病
を押して出席されたようであるが
私は要務で出席出来ないので門弟

の友人の代理出席で喜びを伝え
た。その後容態も一進一退、今春
三月頃から容態悪化の報をうけ、
令夫人からも親しく病状を承り、
ひたすら平癒を祈念しつづけた
が、遂に七月二十七日ご逝去の直
後、近藤教授から悲報を受け、只
茫然限りない哀惜の感に打たれ
た。

七月二十九日、正定院に於ける
教室葬による葬儀並に告別式に参
列し、お棺に白菊をささげ最後の
お別れをしたが、同寺院は兄が信

林先生に関連して

昭和4年卒 斎藤 亥三雄

御承知の通り先生は京都大学御
退官後、同志社大学教授として、
同志社の学生及び教員の御指導を
賜りました。唯御病気がちでござ
いましたために、私共は一日も早
くお元氣になられますように祈っ
ておりましたが、まことに残念で
ございます。

思ひかえてみますと、先生の
同志社大学工学部に対する御配慮
は、遠く同志社工業専門学校時代
にさかのぼります。昭和二十一、
二年頃、私が創設後まもない工業
専門学校の整備につとめておりま
したとき、よく先生のところへお
智慧を拝借に参りました。先生は
加藤信義先生と御相談下さり不用

州から京都に出て、最初に下宿さ
れたところと聞き、因縁の不思議
さを感じたことである。

おおよそ死は万人に洩れなく訪
れる嚴肅な事実であり、我々同期
の物故者も既に五十四名中二十五
名に達し、自らの余命を考えると
感慨一入のものがある。

しばしの惜別の情を捧げながら
在りし日の兄の厚い友情を感謝
し、ご冥福を心から祈り奉る。

九月四日

建のために心を用いられました。それがようやく前述の工業専門学校として新発足するに至りました。そのときの中心となつて尽力されました方は、内部にあっては石川芳次郎理事(同志普通学校卒、京都帝大、電気工科学科)であり、外部にあっては鳥養利三郎

京大総長でありました。昭和二十四年、工業専門学校が工学部に昇格するとき、鳥養先生、西原利雄先生、堀場信吉先生が、同志社顧問として御尽力して下さいました。いよいよ工学部が発足する前に、前記西原先生、堀場先生が、阿部清先生とともに同志社大学教授に就任されました。その後岡田

辰三先生、林重憲先生、板田一郎先生を同志社におむかえするにいたりしました。

私はただ一連の事実を述べているにすぎません。これらの諸先生が如何なるお方であるかは今更かくに及ばないことと存じます。

林先生が前後三十年にわたつて種々御配慮下さいましたことを、その背景にあつた事実とともに思ひ浮べつつ、改めて感謝の念を新らたにするものでございます。

個人的なこと一切省略させていただきますが、私自身は約四十年近くの長きにわたり特別に先生におめをかけたいただいたと信じております。しかし、これは或は

林先生に接したすべてのかたがたの心境ではないかとも思われます。夜おそくまでお宅で暮を囲んで奥様やお嬢さまに御迷惑をおか

林 重憲先生を偲ぶ

応用科学研究所理事長
昭和6年 卒 吉 田 洪 二

林 重憲先生は財団法人応用科学研究所の創立者であります故鳥養利三郎先生の後を継いで昭和42年5月理事長の席に就かれましてより、昭和46年3月健康すぐれず職を辞されますまで約4ケ年に涉つて、理事長として研究所のため御尽瘁にあつかりました。

文部省の補助金の獲得、所内制度の改革、研究の指導と多くの業績を残していただきましたこと、所員一同齊しく感謝を捧げるところでございます。また、後に続く者にとりまして、まことに有難いことでありました。

健康を害され理事長の席を退かれましてより、やや健康をとり戻されまして我々所員一同安堵致しておりましたが、最近は入院を重ねられ遂に不帰の彼方に逝かれされたこと、まこと痛恨に堪えません。改めて先生の御生涯と御業績を偲んで深い悲しみの念を新に致しております。

私個人としての先生とのつながりは、今はもう遠い昔のことにな

けいたしました。奥様はじめ皆様御健康と御平安を心よりお祈り申し上げます。

りましたが、故鳥養先生の講座の先輩、助教としてはじまります。我々後輩は公私ともども御指導にあつかり、大変にお世話になりましたこと、ついに数年前のことのように懐しく思い出されま

当時鳥養先生の講座は大世帯でありました。鳥津製作所社長の上西亮二氏、大阪府立大学の教授でありました辻藤吉氏、福井工專教授の藤本勲氏、阪大教授でありました山口次郎氏、理学部出身の西垣正彦氏、同志社大学教授の岩本

国三氏、日本電子科学の竹村清氏、上野製作所の上野満氏等々の後輩諸氏を率いて、団結の中心である林助教教授の存在は特色のあるものでありました。よく学び、よく研究し、そしてよく遊びました。どんな難解な数式に出会つても、林先生にもって行けばという安堵感で、全く先生に頼つて安心していられました。全く申訳なき次第です。

応用科学研究所に於ける研究の

主題でありました火花発振の高周波発生機構の解明は先生御得意の過渡現象理論に負うところでありました。静電作用による砂鉄よりイルメナイト分離の方法も先生が残されました研究の一端であります。

先生に敷いていただきましたレ

寄稿

英文作成力の修得

昭 13 卒 平 野 進

研究論文や技術資料や事務文書を英語で書く力を養うための通信講座を、私の勤めている電気通信協会に開設して今年で5年目になる。毎月一回、問題と標準解答の作成、取りまとめをやり、添削者と話し合うことを4年間続けて来た訳だが、この経験を通じて日頃感じてい

ることを二、三述べてみたい。
和文添削
英文から和文へ、和文から英文への翻訳のまずい人は、必ず、日本語の表現もまずい、そのまずさを悟つて貰うことが語学勉強の第一歩という訳で、ごく実務的な短な短文の添削を課している。

また電算機の出力を棒グラフで表現したり、異つた大きさの

ールに沿つて応用科学研究所は幸とその後も順調に前進を続けております。

私共の寂しさは尽きませんが、先生どうぞ、御安心を以つて研究所の将来の発展を御見守り下さい。謹んで先生の御冥福をお祈りします。

文字を組み合わせた印刷も可能。
非常に精度の高い歯形検査機。現代の子供たちは青葉とか青野菜、青信号などと呼ばれているものが、色別的に青か緑か区別できないということは、絵本とか学校での図画を通じてま

ずないだろう。
表現が明確一義的か、文体や言葉と言葉とのバランスがとれているか、論理が通つているか、などの見地から添削を行っている。日本語として読むに耐えるかどうか添削の趣旨であつて、英訳可能かどうかの見地から添削している訳ではない。英作文の勉強にどう

して日本語の勉強が必要かという

幼稚な反論はようやく影をひそめた。

英文和訳

読むことは出来るか書くことは苦手という人が多いが、これは真実ではない。読むことが出来ると誤信している位だから書けないのに過ぎない。大体こんなことだろうとの見当はついても本当にこうだと言いつ切るのは難かしい。

○ Mary promised that they would come early.

私達は早く参りますとメアリーは約束した。

(他人の行動や行為を promise することはできない)

○ By the use of computer systems to mechanize facility and equipment inventory records, we should increase the efficiency of this work by more than five percent by 1980.

施設および装置の目録作成を機械化するためコンピュータシステムを利用することによって、この仕事の能率を一九八〇年までに5%以上向上させることが出来るものと私達は思っています。

○ Try to distinguish between those judgments which involve personal preference and are not provable and those which may be supported by evidence.

ness and arguments.

個人の好みを含むうゑに証明できないような判断と、いろいろの証拠や議論によって正しいことが裏付けられる可能性のある判断とを区別することを、いろいろの判断について試みてご覧なさい。

このような簡単な文章でも、例えば次のような答案が出る。

個人的な好みは左右され、かつ証明しえない判断と、明確な根拠と議論の末に支持される判断との相違を明確にしておく必要がある。

1) involve には左右されるといふような意味はない。

2) proved は書いてない。

3) evidence は明確な根拠ではない。○ evidence が非可算名詞であるために単数形にはなっていない。 arguments が複数形になっているのでいろいろの証拠と訳すのがよい。

4) 末にの意味ではない。

5) are とは書いてない。

6) 文意を離れている。

和文の意味を正確に読みとり適切な言葉を綴り合わせなくてはならない。そのスイッチはそんなに早く

磨耗する筈がな。

The switch does not wear out so soon.

The switch couldnot have worn out so soon.

二通りの解釈ができる原文である。もしはではなくがであれば後の方の訳となる。する筈がないがした筈がないの意味を持つうゑのはすると筈がないとの結び付きに由来する。前の方を cannot wear out とするの誤りである。 cannot wear out は結びつかない言葉である。

(2) 科学者の仕事の仕方 (way) にはいろいろの (many) 仕方がある。偉大な科学的発見が想像力 (imagination) のすばらしさ (great) 飛躍 (flight) 新ひびく輝かしさ (glory) 結果であることが珍らしい。もし諸君が物理学を学んだことがあるとすると、諸君はき

ききき (certainly probably surely) 読んだにきがないのだが、液体に浸した (immerse, soak) 物体の重さの変化に

Archimedes がすばらしさ (brilliant) 思ひきき天才のひらめきを得た (have) の

は、彼が風呂に入っていたとき

だったといわれている。

Scientists do their work in

manyways. A great scientific

disco very is often the result of a great flight of the imagination—a brilliant new idea.

If you have studied physics, you probably read that Archimedes is said to have been taking a bath when he had his brilliant idea, a "Flash of genius," about the change in weight of a body in a liquid.

この問題で () で示した箇所は、この中の適当な用語を適ようにという指示である。これに対する一答案とその添削結果は次の通りである。

Scientists do their work in many ways. A great scientific discovery is often the outcome of a great flight of the imagination... a brilliant new idea.

If you have studied physics, you probably read that when Archimedes was taking a bath he had his brilliant idea, a "Flash of genius" about a change in weight of a body immersed in liquid.

非可算名詞として用いられて

new は後にくる。和文と比べ

very bright の意。

idea の中身の説明をするのではないから calon は不適

Learn は knowledge や skill を習得する意。

文法的に完全な誤り。

certainly without doubt の意となり不適。

when の位置をこのように変更の方が英語としてよい。原文と比べてみるう。

文脈から his でなくてはならない。

genus はここでは非可算的に用いるため。

his brilliant idea, a flash of genius, about ... が本来の形であるが comma が必要。

change of weather と change in weight とはいわな。

内容としては特定の液体を想い浮べているため。

この答案を書いた人は、かなり英文の書ける人であるが、それ

もこれだけ多くの誤りがある。

英語の単語の network 中の

の言葉として勉強しないと全

々役に立たない、英英辞書をひく

習慣を若い方につけて頂きたい。英文を丁寧に読みとり出来る限り

日本語らしい日本語に訳し、十分時間をおいてからこれを再び英訳し原文と比べるとは非常に勉強になる、英文和訳や和文英訳の問題点をよく認識した上で、立派なやさしい英文を沢山音読することは語感を身につけるうえで非常によい勉強法である。Bell Laboratories Record & Readers Digestなどは、まことに打ってつけの教材である。

研究室紹介

有線通信工学講座

昭34年卒 長尾 真

有線通信工学講座は、近年前田憲一教授、坂井利之教授が担当して来られたが、坂井教授が情報工学科へ移られ、前田教授がご退官になったあと、昭和48年10月より私が同講座を担当することになり、現在に至っている。前田・坂井両教授には永らくご指導を得た。

日頃から最も適切な日本語で自分の考えや感情を述べる努力を怠っている。「英語」どころか「言葉」自体に対する感覚を失ってしまふ。Case by case とか image 印、とかいう風な英語(?)は使わぬことである。

修飾の問題、助動詞の問題、logicの問題等、機会をみて述べさせて頂きたい。

おき、これまで4年間精力的に研究を行って来た。従来、通信といえば通信媒体、通信方式がその研究の中心であったが、計算機・情報処理技術が発達してくるにつれて、伝送される情報内容そのものの性質を探究し、情報を内容に応じてどのように処理すればよいかという点、さらに、通信は、人間対人間の対話であるから、送信者と受信者がどれだけの知識をもっているかによって、伝送さるべき情報が全く異なり、受信された時の情報量の評価が全く異なることなど、通信の本質の問題としての情

報の内容を解明する方向の研究を解明する方向の研究を中心として、それにまつわる論理装置、ソフト・ウェアなどについての研究も行っている。現在のところ、まだ助教役はないが、辻井潤一君、松山隆司君の2名の助手が立派な業績をあげつつあり、十数名の大学院・学部学生、外国からの訪問研究生などを加えて活発に研究を行っている。

研究内容はほぼ次の通りである。

- 一、言語情報処理に関する研究
- 人間における通信の手段の中心となるものは言葉である。言語のもつ性質、言語活動のもととなる知識等についてくわしく研究することによって、人間における情報、通信とは何かを明らかにすることが究極の目標である。言語を工学的にながめると非常に多くの問題が存在するが、我々はここ3、4年、次のような問題をとり上げ解決をはかって来た。
- 1、日本語文字、任意言語文学の入出力システム。
- 2、国語辞典の情報システム内での活用システム。
- 3、日本語文の自動わかち書き。
- 4、日本語文の構造的意味的解析。
- 5、日本語文章(複数文)の総合的解析。

- 6、質問応答システム(自然な日本語による情報システムへの問合せ)
 - 7、質問応答プロセスと推論過程。
 - 8、文章中の重要概念語の自動抽出。
 - 9、大量日本語情報の蓄積・検索システム。
- 今後は英語についても各種の研究を行い、近くまた英語・日本語間の自動翻訳の研究にとりかかろうと思っている。

- 二、パターン認識・画像処理に関する研究。
- 人間における情報、獲得手段のもう一つの重要な分野は視覚情報であり、画像である。通信の立場からは、画像データの圧縮伝送が主たる関心であるが、さらに高度の処理判断を行うことは、伝送の立場はもちろん、多くの工業応用として重要な問題である。この問題については過去10年以上種々の研究を行って来たが、ここ3、4年は次のような問題に取り組んでいる。
- 1、画像の正確な復元
- 2、画像の解鋭化
- 3、画像の雑音除去(特に画像の鮮鋭さをそこなむ雑音除去)
- 4、画像の特徴抽出。
- 5、画質、模様(テキストチュア)の性質。

- 6、画像の構造的意味的解釈。
 - 7、マルチバンド航空写真の解釈。
 - 8、地図と航空写真との関係。
- 今後はさらに多種類の複雑な画像について、より正確な解析が行えるよう、各種の画像処理技術を研究開発してゆくと共に、画像処理のための効率的で能力の高いソフトウェアシステムを実現すべく努力してゆくつもりである。

- 三、ディジタルシステムに関する研究。
- 以上一、二のような特殊な情報を処理するためには、従来の計算機では種々の不便があり、問題の特性に応じた構造の計算機が必要となる。また大量情報の高次処理を行うためには、入出力装置、補助記憶装置等に特殊なものが要求され、これらの特殊性を生かしたディジタルシステムを構成する必要が出て来た。このようなことを念頭におき次のような研究を行っている。
- 1、LISPマシンの設計・製作。(記号処理、言語情報処理に適したプログラミング言語LISPをフレームウェアで実行する計算機の研究)
- 2、言語情報処理のためのプログラミングシステム
- 3、画像処理のための計算機の構造

4、画像処理のためのソフトウェア

以上すこし技術的にこまかい話になってしまったが、この4年間に行ってきた研究の概要を紹介した。今後はこのような方向をさらに発展させると共に、種々の新しいファクターを導入し、新しい分野を開拓してゆきたい。研究室の学生には、広く深い学問分野の中で、自分の行っている研究の位置づけや、自分の考え方を明確にさせると共に、ハードウェア、ソフトウェア両面についての訓練を行い、しっかりと技術者に育てあげてゆくよう心がけている。

なを私個人について言えば、文部省の研究所として万国博跡地に

総会及び同窓会記事

昭和13年卒同窓会
中国支部総会及び鶴友会のこと

松田長三郎

去る6月28日、昭和13年卒業の方々の会が、東京赤坂の「まんがん」で催うされ、お招きを受け、お元気な各位の近況を伺って大変愉快でした。殊に松尾三郎さん、宇宙開発に関する研究なり事業なりが大規模に進められ、多数

設立された国立民俗学博物館(梅棹忠夫館長)のコンピュータ民族学部門の教授を併任している。民族学は各種の学問的要素の共存する横にひろい分野であり、世界の種々の文化形態の比較研究が中心的な重要な課題となっている。この分野に対して計算機を応用するわけである。情報としては文字情報、図形・画像情報、音響情報などあらゆる種類のものがあり、これらは情報学からみて宝庫のようなものである。また博物館の情報管理も重要な仕事であり、漢字その他の文字を扱うことのできる大きな情報システムを建設しようとしている。若々しく楽しい分野である。

7月1日の中国支部総会にお招きを受け教室から近藤文治教授、洛友会から私が出席しました。総会・懇親会については、支部から御報告がある管ですが、真田支部長初め、新旧各役員のお骨折りで、盛会裡に終了できたことは大変結構でした。教室関係については近藤教授から、洛友会関係は私から御報告しました。残念ながら、常連の山本幹事のご欠席は淋しいことでした。翌日は、三菱重工の太陽熱発電の研究施設を見学し、私はその後山口(秋芳台・秋芳洞)、津和野(森鷗外出生地)、萩(松下村塾等)等のご案内を受け、多数の人材を養成して、維新回天の大業の素地を作った偉大な先覚者吉田松陰(29才の若さで処刑せられた)の霊を弔った。中国電力本社・山口支店、萩営業所の各位に厚く御礼申し上げます。

の所員が種ヶ島の現地に出張しておられる由、宇宙開発はこれからの注目すべき目玉プロジェクトの一つで、益々御発展を祈ります。赤坂の名妓やポリドールの歌手の歌謡は結構でした。東京支部長富岡正春さんのドイッ・リードは敬

服の至り。各位の御健康を祈ります。

9月10日、東京ステーションホテルにおける鶴友会(明治・大正年代の在京卒業生の会)にお招きを受け、多数会員各位にお目にかかれて幸せでした。従来は鳥養先生が御出席でした。会員各位のご健康を祈ります。

第22回洛友会四国支部総会は、6月11日(土)PM6時より、高松市「紅羽」にて開催された。本年度は、本部から松田会長、教室からは池上教授をお迎えし、また、支部からは31名もの会員が、四国各地から、忙しい中、参加した。総会では、松田、池上両先生より、本部および教室の最近の状況を伺うとともに、先年他界された鳥養先生のご冥福を祈って1分間黙祷をさされた。

第22回洛友会四国支部総会について

続いて懇親会に移り、和気あいあいの中で、先輩、後輩酒をくみかわし、ある者は遠く過ぎ去った

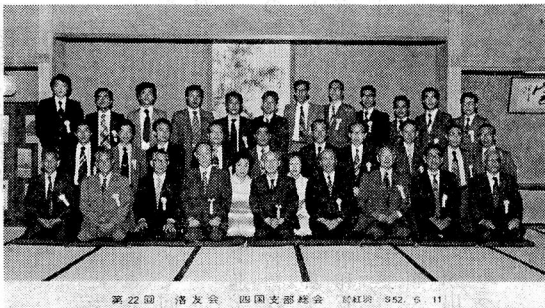
学舎を思い、ある者は、最近のエネルギー問題について議論をしつつ、互いに親睦を深め、9時過ぎ散会した。

今年度は、新会員の加入がなかったので残念であった。なお、池上教授は、前日、最近注目を集めている「光ファイバー通信」について講演された。

以上 (山地記)

昭十会同窓会

昭和十年卒業の昭十会は卒業四十三周年(入学四十五周年)同窓会を富士山麓御殿場で開催した。五月六日新幹線三島駅に集合後そろって新しく完成した富士通沼津

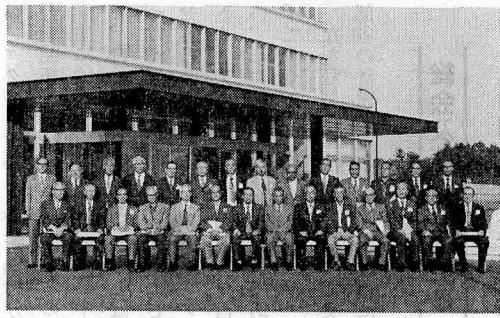


第22回 洛友会 四国支部総会 昭和52年6月11日



工場を訪問、最新のLSIによる大形計算機の見学をした。見学後懇親パーティー。同夜は御殿場の富士ヘルスホテルに宿泊。

翌七日は二班にわかれ、一班は新緑の富士五湖めぐりを楽しみ、二班は富士ヘルスカントリークラブにてゴルフを楽しんだ。ゴルフは東西対抗プレーで関西勢が勝利をおさめ、和気あいあいのうちに再会を約して散会。

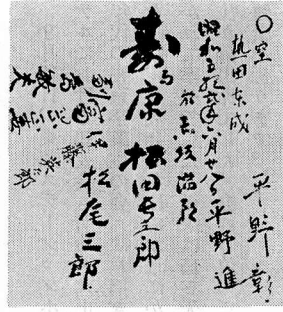
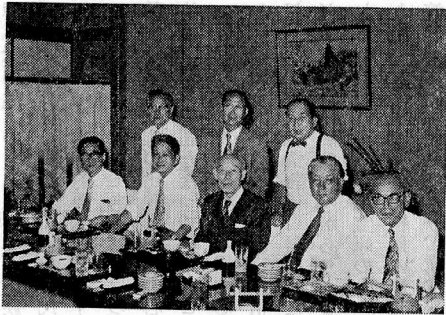


今回の出席者は左の二十八名。
天野宗明、有馬敏彦、井上友一郎、大塚好造、大曲俊彦、荻野和夫、小林大祐、香山日出雄、神谷進、北村芳雄、黒田治夫、小寺正晔、佐野一雄、塩沢弘、清水威寛、高田昇平、高木正、殿井不二雄、中

沼保三、中畑孝志、林潔、日高安壮、藤本悟郎、山上隆也、山田昇和久利保、和田寿太郎、徳岡毅。(幹事小林大祐、有馬敏彦)

昭和十三年卒業 東京クラス会の記

吾々昭和十三年組の東京在住者は、16名を数える。毎年二、三回は集っているが、毎回十二、三名の出席で、それも常連になりつつある。集会は成るべく、地方のクラスの人々が上京した時に、その人を中心に集るようになっている。日時は決めていない。最近は、九州の山口高雪君、京都の大谷泰之君、大阪の小林四郎君、水野正光君の上京の機会に夫々集っている。



然し、去る6月28日の、恩師松田長三郎先生の御出席を得てのクラス会は、東京で始めての催しであり、卒業以来三十九年振りの感激の一夜であった。場所は赤坂「まんがん」。

松田先生 八十三才とは思えぬ位、若々しくて、御壮健。数々の御話の中で、若き学生の頃を思い出すこと、しばしば。特に原子力工学等、未来工学に示される松田先生の情熱には、頭が下る思いがした。

出席者は、熱田勤君、伊藤勤君、伊藤英太郎君、副島敏夫君、富岡正春君、平野彰君、平野進君、と松尾三郎の七名であった。
松田先生のお話の後、赤坂小花の民謡等々盛会で夜の更けるのを忘れる位であった。

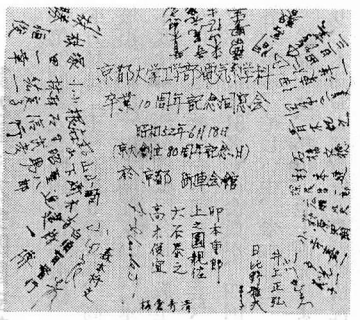
(松尾三郎記)

昭和42年卒業 10周年同窓会

京都大学創立80周年記念日に当たる、去る6月18日、京都御車会館にて卒業10周年にして初めて同窓会を開催した。

当時教室主任として卒業・進学のお世話になった大谷泰之名誉教授、上之園親佐・高木俊宣、卯本重郎の各教授をお迎えし、昭和42年に学部を卒業、昭和44年に大学院修士課程を修了した懐しい顔ぶれ41名(夫人、子供を含む)が出席して、なかなかの盛会であった。

午後5時半まず当時教室主任の一人であられた故阪口忠雄教授の御冥福を祈って一分間の黙祷を捧げた後開宴した。仁田且三君の軽妙な司会で、各先生方のお話を拝聴し、同窓生らの近況報告に耳を



傾けながら、和気あいあいのうちに時のたつのも忘れんばかりであった。夫人を同伴した者も数名あり宴会は極めて和やかな雰囲気であった。
最後に、5年後東京で再会することを約してお開きとなった。
(板倉秀清・深尾昌一郎記)

計	報
昭2卒	諏訪部市郎 52・4・15
講大5卒	山谷 為吉 52・6・3
昭31卒	奈良 明直 52・7・1
昭5卒	白坂 要 52・7・7
昭2卒	林 重憲 52・7・28
大11卒	山田 次郎 52・8・14
講大8卒	高田 弥市 52・8・28
大12卒	今田 英作 52・9・7
大9卒	平岩 強 52・8・13